

2012年3月期 第1四半期業績概要

2011年 7月29日

アンリツ株式会社
代表取締役社長 橋本 裕一



東証第1部:6754
<http://www.anritsu.com>



Anritsu Discover What's Possible™

1

Financial Results FY2011Q1
Copyright© ANRITSU

注 記

本資料に記載されている、アンリツの現在の計画、戦略、確信などのうち、歴史的
事実でないものは将来の業績等に関する見通しであり、リスクや不確実な要因を
含んでおります。将来の業績等に関する見通しは、将来の営業活動や業績に関
する説明における「計画」、「戦略」、「確信」、「見通し」、「予測」、「予想」、「可能
性」やその類義語を用いたものに限定されるものではありません。実際の業績は、
さまざまな要因により、これら見通しとは大きく異なる結果となりうることをご承知
おきください。

実際の業績に影響を与える重要な要因は、アンリツの事業領域を取り巻く日本、
米州、欧州、アジア等の経済情勢、アンリツの製品、サービスに対する需要動向
や競争激化による価格下落圧力、激しい競争にさらされた市場の中でアンリツが
引き続き顧客に受け入れられる製品、サービスを提供できる能力、為替レートな
どです。

なお、業績に影響を与える要因はこれらに限定されるものではありません。また、
法令で求められている場合を除き、アンリツは、あらたな情報、将来の事象により、
将来の見通しを修正して公表する義務を負うものではありません。

目次





1. 事業概要
 2. 2012年3月期第1四半期 連結決算概要
 3. 2012年3月期 通期見通し
 4. 配当について
 5. モバイルブロードバンドの進展と計測ビジネス
- Appendix: 当社事業セグメントの概要
-

1. 事業概要 - 事業セグメントの呼称と事業内容 -

セグメント	サブセグメント	事業内容			
計測	モバイル市場	LTE、3Gなどの携帯端末、チップセットの開発・製造・保守用テストなど			
	ネットワーク・インフラ市場	光・デジタル・IP通信機器の開発・製造用テスト、有線および無線ネットワークの敷設・保守用テスト、サービスアシュアランスなど			
	エレクトロニクス市場	無線設備、電子部品等の開発・製造用テスト、汎用テストなど			
産業機械		食品・薬品・化粧品用重量選別機、異物検出機、電気機器プリント板向け精密計測など			
情報通信		映像配信機器、通信機器、IPスイッチとその応用システムなど			
その他		光デバイス、物流、厚生サービス、不動産賃貸など			
2011年3月期 売上比率		計測 69%	産業機械 16%	情報 5%	その他 10%
モバイル 約30%	ネットワーク・インフラ 約40%	エレクトロニクス 約30%			

今期から、精密計測事業の区分を「その他」から「産業機械」に変更しています。
その他は変更ありません。

2. 連結決算概要 - ポイント -

セグメント	2012年3月期 第1四半期の状況	実績
計測	<ul style="list-style-type: none"> ・スマートフォン製造用計測器のビジネス獲得 ・LTE開発用計測器の需要増大 ・無線インフラ向け建設・保守用計測器が堅調 	
産業機械	日本、海外ともに堅調に推移	
情報通信	顧客の投資、当社ビジネスともに前年並み	
その他	前期堅調に推移した映像配信市場向け光デバイスの需要は一巡	

第1四半期の業績は、前年度に引き続いて、

- (1) スマートフォンやタブレット端末に代表される、新携帯端末の開発競争と市場投入で活発な動きを見せる携帯端末製造市場と、
- (2) 第4世代の新たなモバイル通信方式、LTE方式の研究開発用の需要拡大が、計測事業を引き続き牽引しました。
- (3) また、当社が強い競争力を持つ無線インフラの建設保守市場向けのハンドヘルド・テスターは、北米、アジアを軸に、世界の全ての地域で順調に受注を拡大させました。

産業機械事業は、東北地方の水産業の復興需要や西日本地域での製造能力増加のための投資などに牽引されたほか、北米をはじめとする海外市場でも堅調に推移しました。

2. 連結決算概要 - 第1四半期業績サマリー -

受注が伸張、大幅増益

(単位: 億円)

	前第1四半期 (4-6月)実績	当第1四半期 (4-6月)実績	前年同期比 増減額	前年同期比 増減率(%)
受注高	179	231	52	29%
売上高	168	195	27	16%
営業利益	9	22	13	144%
経常利益	3	20	17	683%
税引前当期純利益	2	20	18	963%
当期純利益	1	19	18	-
フリーキャッシュフロー	42	32	△10	△24%

(注) 値はそれぞれの欄で四捨五入

受注高は、前年同期比29%増加の231億円でした。

売上高は、前年同期比16%増加の195億円でした。主力の計測事業の大幅な増収増益によって、グループ全体としても、営業利益、経常利益、純利益とも、前年同期比で大幅な増益となりました。

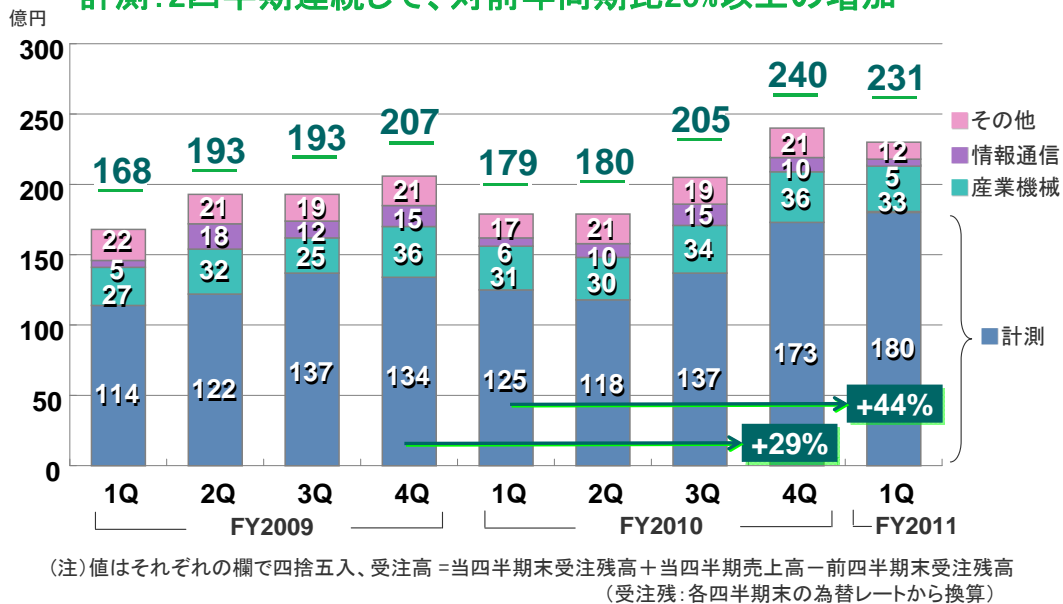
増収増益の主な要因は、

(1) スマートフォン市場の拡大に伴って、携帯端末の製造ライン向けのテスターの受注が、携帯端末メーカー、アジアのEMSから増加したこと、加えて量産効果などによってコストダウンが進んだこと

(2) LTEへの旺盛な開発投資を背景に、チップ開発用や規格適合試験の計測システム、ネットワークとの相互接続の検証、品質保証する試験システムなどのソフトウェアの比率の高い計測ソリューションの競争優位性が高まったことなどにより、売上、利益ともに大幅な上昇となりました。

2. 連結決算概要 - 受注高推移 -

計測: 2四半期連続して、対前年同期比25%以上の増加



Anritsu Discover What's Possible™

7

Financial Results FY2011Q1
Copyright© ANRITSU

計測事業の受注高は、前年同四半期の比較で、前四半期は+29%、当四半期は+44%と2四半期連続して、大幅に増加しました。これらの主な要因は、堅調な基地局の建設保守分野に加えて、LTE関連の研究開発用途や、アジアの携帯端末の製造市場で、Tier1ベンダーやアジアのEMSからまとまった受注案件を獲得したことによります。

2. 連結決算概要 - 事業別売上高・営業利益 -

計測事業がけん引

(単位: 億円)

		前第1四半期 (4-6月)実績	当第1四半期 (4-6月)実績	前年同期比 増減額	前年同期比 増減率(%)
計測	売上高	118	151	33	28%
	営業利益	7	24	17	254%
産業機械	売上高	26	28	2	9%
	営業利益	0	△1	△1	-
情報通信	売上高	5	5	0	△6%
	営業利益	△2	△3	△1	-
その他 (含:内部消去)	売上高	19	11	△8	△40%
	営業利益	5	1	△4	△69%
合計	売上高	168	195	27	16%
	営業利益	9	22	13	144%

(注)値はそれぞれの欄で四捨五入

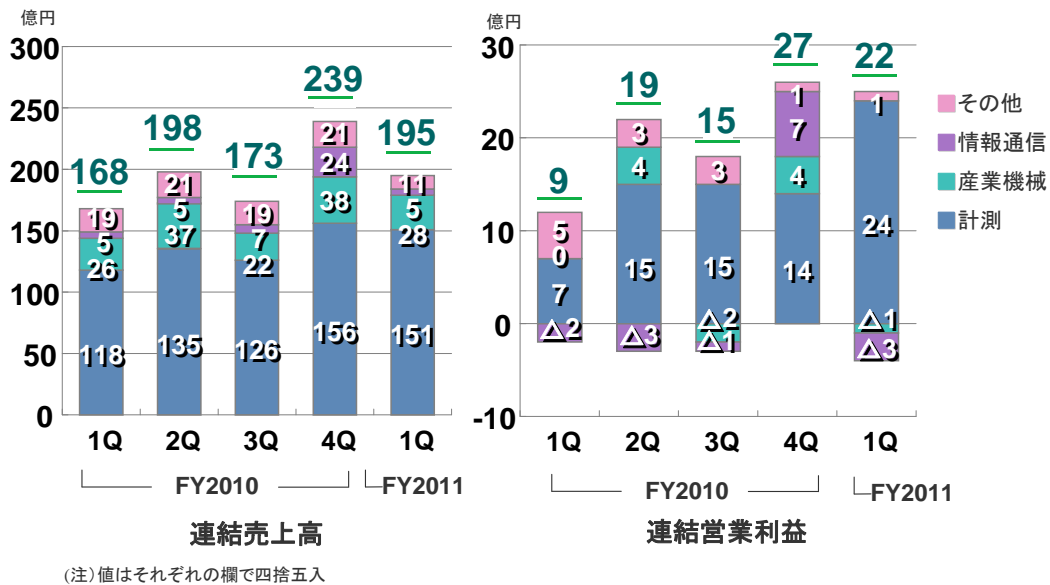
計測事業は、前年同期比28%の増収となる151億円を達成し、大幅な増益で、営業利益24億円、営業利益率16.1%となりました。

この主な要因は、

- (1) 2G、3G、3.5G、LTEの全ての方式にマルチに対応できる、携帯端末の製造用ソリューションが好調に伸びていることと、
- (2) LTEとネットワークの相互接続試験、認証試験を行うコンフォーマンステストシステムが好調だったこと、などによります。

計測以外の事業は、総じて前年並みの成績ですが、その他事業は、主に、映像配信市場関連の光デバイス事業の投資が一巡したことにより、減収減益となりました。

2. 連結決算概要 - 四半期毎 売上高・営業損益 - Q1で営業利益率11%を達成



Anritsu Discover What's Possible™

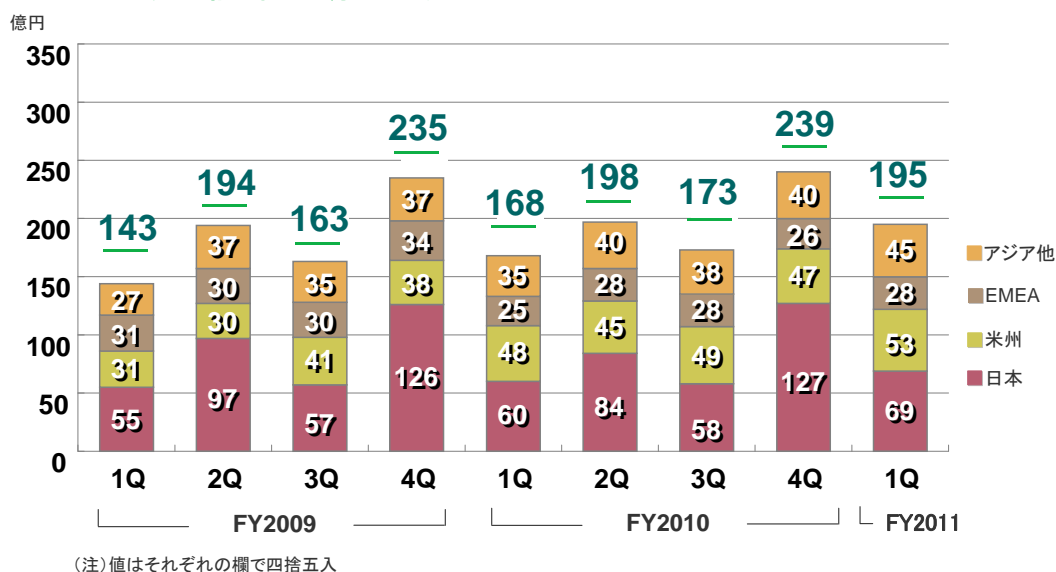
9

Financial Results FY2011Q1
Copyright© ANRITSU

当第1四半期の連結営業利益率は11.4%となりました。計測事業の四半期単位の営業利益率は、前年度第4四半期の東日本大震災関連の費用を除外すると、前年度第2四半期から4四半期連続して、10%を超える営業利益率を達成したことになり、確実に利益体質を改善していると見ています。

2. 連結決算概要 - 地域別売上高推移 -

全地域で前年同期比プラス



米州は、無線ネットワークの整備や基地局の建設保守の投資が順調に推移していることと、LTEをはじめとするモバイル・ブロードバンドの開発用途の拡大により、5四半期連続して、前年同期比で増加となりました。

一方、日本市場は、大震災による景気への悪影響はあるものの、ほぼリーマンショック以前の水準近くまで戻りつつあります。

アジア市場は、計測、産業機械の各事業とも、順調に成長しつつあり、とりわけ携帯端末の製造向けのテスターが好調でした。

EMEAは、金融不安に伴う顧客の投資抑制等もあり、回復の力強さはないものの前年同期比で伸びています。

2. 連結決算概要 - 営業外・特別損益 -

(単位: 百万円)

	前第1四半期 (4-6月)実績	当第1四半期 (4-6月)実績
営業利益	914	2,234
金融収支	△ 144	△ 100
為替差損益	△ 514	△ 164
その他	△ 4	11
営業外損益計	△ 661	△ 254
経常利益	253	1,980
投資有価証券評価損	△ 0	△ 20
資産除去債務会計基準 の適用に伴う影響額	△ 68	-
特別損益計	△ 68	△ 20
税引前利益	184	1,960

(注) 値はそれぞれの欄で四捨五入

為替は1 \$ = 80円台が定着する中、1億64百万円の為替差損が発生しました。なお、想定レートは、年初、1 \$ = 85円、1ユーロ = 110円でしたが、ドルの想定レートを、1 \$ = 80円に見直しています。

2. 連結決算概要 - キャッシュフロー -

内訳

単位: 億円 △減少

着実にキャッシュフローを創出

第1四半期

①営業CF: 35億円

②投資CF: △ 3億円

③財務CF: △ 8億円

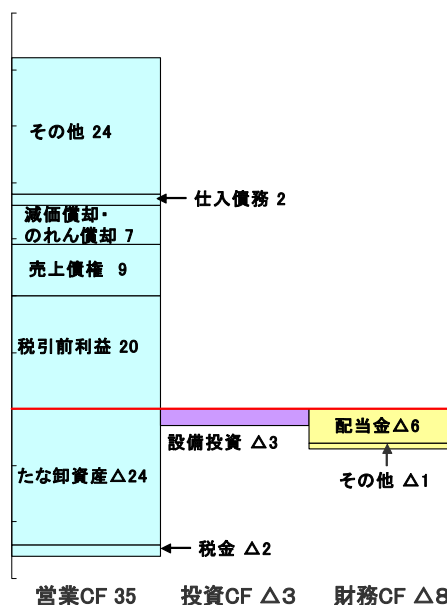
フリーキャッシュフロー

(①+②): 32億円

現金同等物期末残高

303億円

(注)値はそれぞれの欄で四捨五入



営業キャッシュフローは35億円の資金獲得となりました。

これの主な要因は、利益の増加と前年度末に計上された売上債権の回収が進んだことなどによります。一方、受注の増加に伴う第2四半期での増産対応のために、棚卸資産は増加しました。設備投資は計画どおりの実行でした。その結果、フリー・キャッシュフローは32億円の資金獲得となりました。

3. 2012年3月期 通期の見通し(連結)

上期、通期ともに上方修正

(単位：億円)

	FY2011				FY2010	
	H1 前回予想	H1 今回予想	通期 前回予想	通期 今回予想	H1実績	通期実績
売上高	365	430	800	865	366	779
営業利益	15	55	62	110	28	70
経常利益	11	50	55	100	18	54
当期純利益	6	35	38	70	10	31
計測	売上高		330	565	253	535
	営業利益		57	50	98	22
産業機械	売上高		67	140	63	123
	営業利益		2	7	7	4
情報通信	売上高		8	40	10	41
	営業利益		△6	0	0	△6
その他	売上高		25	55	40	79
	営業利益		2	5	5	8

(注) 値はそれぞれの欄で四捨五入

2012/3月期から産業機械事業に、その他セグメントの精密計測事業を統合しています。

(参考) 想定為替レート: 1米ドル=80円

1ユーロ=110円

計測事業の好調により、上半期、通期ともに上方修正します。なお、計測事業以外のセグメントは、期初見込みの通りであり、変更はありません。

計測事業は、

- (1) スマートフォン需要の急拡大に伴い、上半期においては、クリスマス商戦向けや製造能力の増強などを目的とした携帯端末ベンダーからの、積極的な投資案件を順調に受注しました。下半期においては、端末製造用テストの投資は、上半期のようなロットのまとまった、積極的な設備投資動向や大型案件はないものの、研究開発用途に比べて裾野の広いことから、安定的に推移するものと見込んでいます。
- (2) また、LTE関連でも、ネットワークとの相互接続試験等の需要が上半期で想定を上回るペースの進捗となっているため、下半期は堅調なレベルに落ち着くものと見込んでいます。

為替の動向や欧米の景気の減速懸念など、先行きに不透明要因はあるものの、計測事業の増収増益分を織り込んで、全体としても、売上高、営業利益、経常利益及び当期純利益の各項目を上方修正いたします。

4. 配当について

年間配当：

8円 → 10円(うち、中間配当5円) に増配

配当方針

株主の皆さまへの利益還元策として、連結当期純利益の水準に応じて、連結純資産配当率(DOE)を上昇させることを基本に、事業環境などの諸般の事情を総合的に考慮して決定しています。

業績予想の修正に伴い、配当を期初予定の1株あたり、中間配当4円、年間8円から、年間2円を増額し、年間配当10円、うち中間配当として5円の配当金に増配いたします。

5. モバイルブロードバンドの進展と計測ビジネス

(1) モバイルブロードバンドの進展

- ① 新アプリケーション、サービスの充実と普及
- ② スマート端末の新モデル販売競争
- ③ 携帯加入者数の増加

モバイルデータトラフィックの急激な増加

モバイルネットワークのブロードバンド化

- ・3G/LTEの進展
- ・W-LAN、WiMAXなどの併用



変更した2011年度の通期見通しを達成すると、計測事業の営業利益および営業利益率は、昨年4月に発表した中期経営計画GLP2012およびAnritsu120の目標水準を達成することになります。

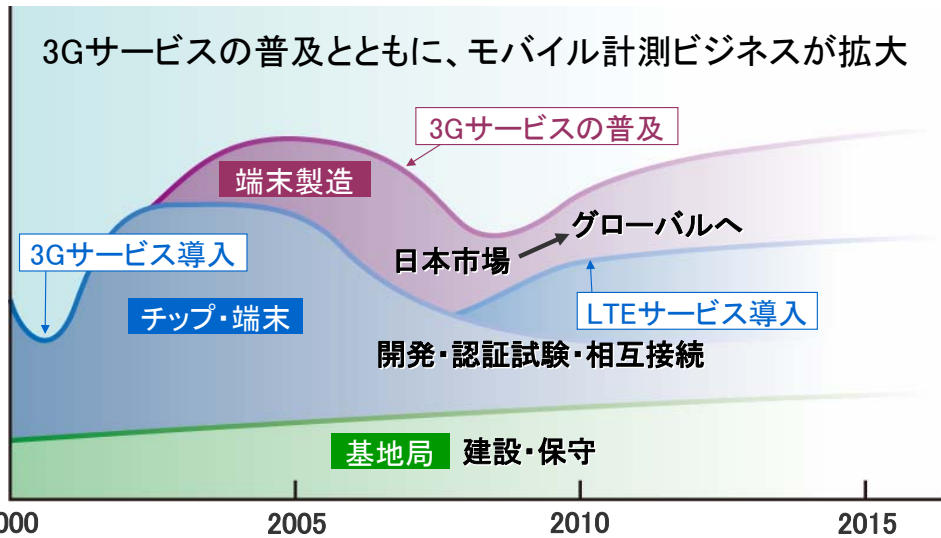
この状況と変化を踏まえて、当社計測事業の動向について説明します。

まず外部環境から概括的に整理しますと、その背景には、

(1) モバイル分野での新しいアプリケーションやサービスの充実と目覚ましい普及があります。(2) それを促進させているのは、新しい感覚と操作性を充実した、さまざまなスマート端末があり、新しいモデルの熾烈な開発と販売競争があります。

このために、モバイル・データ・トラフィックは毎年2倍から3倍ずつ爆発的に増加しています。増加の一途を辿るモバイル・データ・トラフィックをストレスなくこなすために、光ファイバー並みの処理能力を持つ第4世代、LTE方式の開発と商用化、普及、そしてW-LAN、Wi-Maxなどのノンセルラー方式とのマルチ運用などが、ますます促進される動きになっています。

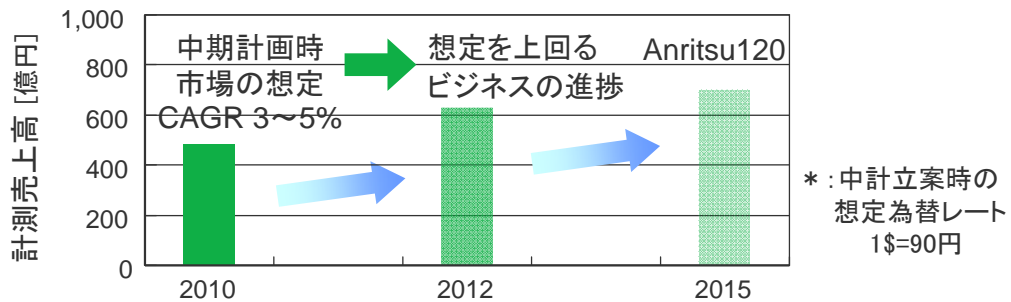
5. モバイルブロードバンドの進展と計測ビジネス (2) モバイル計測ビジネスの過去・現在・未来



アンリツのモバイル計測ビジネスの世界市場における強みは、とりわけ第3世代サービスの開発の当初から、オペレーター、チップ・ベンダーや携帯端末メーカーへの、卓越した開発環境の提供によって発揮されるようになりました。3Gサービスのまとまった普及は、日本市場が最初であったということも、顧客サポートの面で優位に働きました。現在の開発環境の提供は、LTEにシフトしており、この分野でのアンリツの計測システムの優位性、顧客サポート力は高く評価されています。携帯端末加入者の80%近くは、未だに2G方式ですが、3G方式以上をベースとした高機能化したスマート端末の開発と販売競争、今後普及が期待されるLTE商用端末との親和性などから、製造用分野でも、アンリツの優位性が高まっています。

5. モバイルブロードバンドの進展と計測ビジネス

(3) モバイルブロードバンド進展による計測ビジネスの伸張



モバイルブロードバンドにドライブされる計測ビジネス

端末の開発・製造

- ◎チップ
- ◎端末
- ◎システム

ネットワークのQoS

- ◎基地局
- ・モバイルバックホール
- ・メトロ/コアネットワーク
- ・サービスアシュアランス

デバイス/モジュール

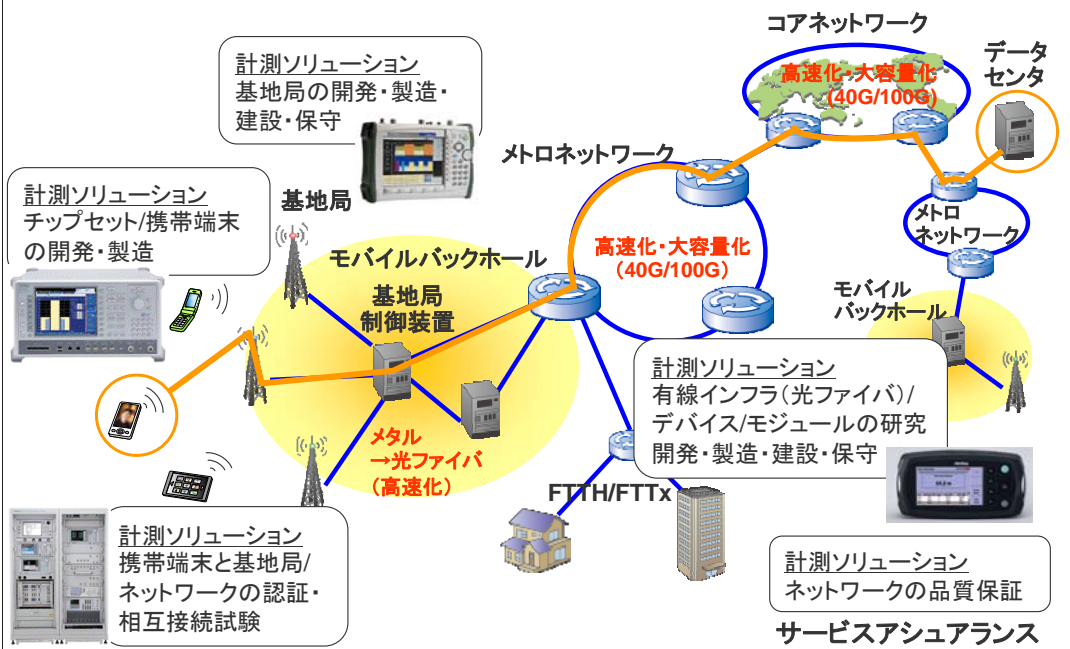
- ・エレクトロニクス

◎: 今期、収益に貢献しているビジネス

モバイル・ブロードバンド・ネットワーク網の高度化、多様化、複雑化は、この分野で必要とされる、あらゆる用途をカバーする充実した品揃えを持つ、アンリツの計測ビジネスの成長ドライバーとなっています。この動きは、今後も中長期にわたって、計測ビジネスの成長率を底上げする可能性を持っていると見ています。



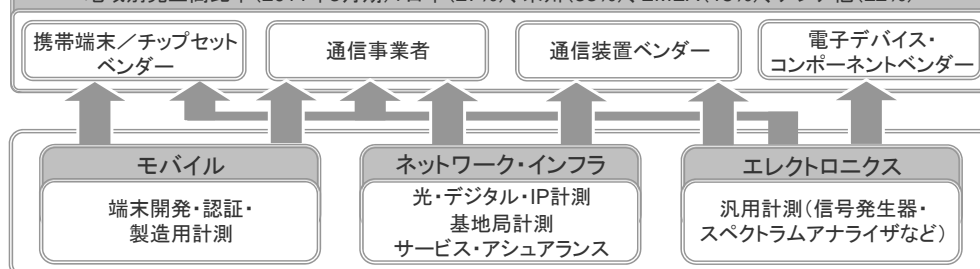
Appendix (1-1) – 計測事業 ビジネス領域 –



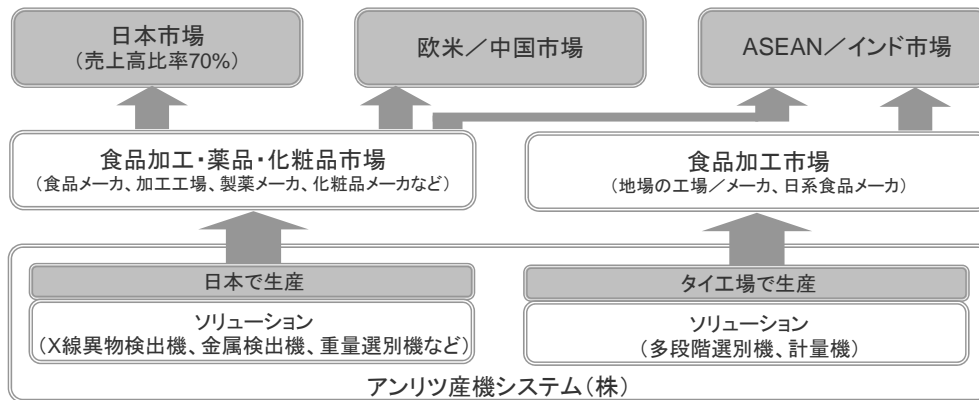
Appendix (1-2) – 計測事業 顧客とマーケットポジション –

	モバイル市場			ネットワーク・インフラ市場		エレクトロニクス市場	
	R&D	製造	保守	R&D	建設・保守	R&D	製造
フォーカス エリア	LTE (端末開発・ 認証試験)	3G/LTE スマートフォン	携帯端末の 修理・保守	40Gbps / 100Gbps 光伝送	無線基地局 光ファイバ敷設 ネットワーク 品質保証・管理	通信用電子部品 / モジュール (携帯端末 / タブレット端末 / カーエレクトロニクス / 家電など) 無線基地局	
主な顧客	携帯端末 / テックセット ベンダー	携帯端末 ベンダー EMS	通信事業者 携帯端末 ベンダー	通信事業者 通信装置 ベンダー	通信事業者 通信建設業者	電子デバイス / コンポーネント ベンダー、通信装置ベンダー、 携帯端末ベンダー など	
グローバル ポジション (当社推定)	LTE開発用 計測市場 シェア50%	3G携帯端末 製造用計測 市場 No.3	日本市場 No.1	光・デジタル 計測器 No.3	無線基地局用 ハンドヘルド 計測器 シェア70-80%	スペクトラムアナライザ、 信号発生器 No.3	

地域別売上高比率(2011年3月期): 日本(27%)、米州(33%)、EMEA(18%)、アジア他(22%)



Appendix (2) – 産業機械事業 –



Appendix (3) – 情報通信事業 –

